

世界統御の力

世界統御の力は権力が將た道徳か

一、現代世界の問題

世界の國際生活は、各國互に相犯し、相食み、相殺し、全然無秩序、無統一の間に、我利の發展擴張のみを圖り、自國の強大の爲には他の國家を無視し、更に之を犠牲に供して顧みざるが如き暴力横行の有様であつた。然し今や此の如き時代をば、既に経過しつゝある。世界の國民生活に一大目的を確立し、人類全體、國民相互の完全なる幸福の爲に統一的大意志を實現して、以て永遠不變なる宇宙精神の進展に協同せんとする要求を示して來たのである。全人類の幸福の爲に、各國民生活を貫くべき、此の統一的大意志とは何であるか。所謂權力意志、即ち自國の發展の爲には暴力を用ゐて他の國家を征服し、他の國民を犠牲とする主義であるか。又は道徳意志、即ち道徳的方法に依つて、國民相互の發展と人類全體の福祉を圖らうとする主義であるか。將來の國際生活はその何れの主義に依つて指導せらるべきであるか、此を決定することは實に今日最急要の先務である。

二、權力意志とは何か

今後、世界の國民生活を指導する根本主義は、權力意志であるか、はた道徳意志であるかを決定するには、先づ此の二つの意志の本質の如何なるものであるかを檢べなくてはならぬ。

先づ權力意志の内容を確めて見やう。此の意志は、固より何れの國家と雖も、或る程度まで之を是認しないものは

ないのであるが、其の最も純粹に且つ顯著に此の意志を發展せしめ、且つ實現して居る代表的國家は獨逸である。故に獨逸に於ける此の意志の如何なるものなるかを見るのが理解の爲に最も便利である。

獨逸の反道徳的權力主義は、トライチユケ、ベルンハルヂー等が、之を完全的に言表して居る。其思想は異なるも此點に於ては一致して居る。

個人主義者なるニイチエは言ふ、權力意志は人生の基調である、關鑰である。仁愛は奴隸道徳である、奴隸道徳を奉じて生活すべき時代は既に過ぎて、今や方に權力本位の道徳を要する時代となつたのである。

國家至上論者なるトライチユケは言ふ。國家は即權力にして、國家意志は力である。戰爭は神聖なり。國家の膨脹は、多く征服に依る。正義は強國に非ざれば貫徹すること能はず、と。

軍國主義者なるベルンハルヂーは言ふ。個人的道徳は國家に適用す可からず、戰爭は必要にして、それ自身善である。自己保存は國家の最高理想にして、此の理想實現の爲には如何なる行動をも是認せらる。國家は自己の行動に對する唯一の審判者である。又弱小なる國家は、強大なる國家と共に並立する權利を有せず。

鐵血宰相ビスマークは言ふ。世界に於て獨逸の敬畏するものは唯神あるのみと。

かくて今や獨逸軍國主義者は神は獨逸國民を以て其の選民として、世界を統御せしめるのであると妄信するに至つたのである。

又全獨逸主義協會の宣言書に曰く、全獨逸主義は、地球上あらゆる獨逸國民感情の復活、其の思想習慣理想信仰の保存を目的とし、所在の獨逸人を打つて一丸と爲して、國家の目的を成就することを以て理想とする。

凡そ此等に現はれたる思想は、全く主我の一方を高調したるものであつて、國家的權力の外に道徳宗教を認めず、乃至は道徳宗教の内容は即ち威力を伴へる國家の主權のみとするのである。其の威力の發動は、即ち正義に外なら

ぬ。内に在つては、各個人の人格の尊嚴なる價値を認めず、各個人は全く國家存立の爲め犠牲と見做される。外に向つては、弱國は總て強大國に隸屬して、その膨脹を助くべきもので、弱肉強食は國際の道德である。國家の威力の主義的發動以外に人道なし、正義なし。此の如きものが、即ち獨逸國家主義の内容又理想であつて、即ち權力主義の本體である。獨逸は此の主義に於ける天の選民と自信し、此を以て輿論を統一し、國民を教育し、而して終に此の使命の實現の爲に、隣邦征服の戰爭を惹起して、曠古未曾有の大亂慘狀を世界に現出せしめたものであることは、啻に世界の批判の歸着するところたるのみならず、獨逸國民の自覺してゐるところであるべき筈である。

三、獨逸の主張

右に述べたる如き權力主義を以て國家の根本理想とし、而して此の權力主義を以て世界を統一して、各國家を其威力下に於ける聯邦と爲し、自ら其の盟主たり、霸王たらんとする一大國是を定めたのは主として普魯西であるが、此は單に一時の好奇的野心ではなく、實に世界に對して天より與へられたる獨逸永遠の使命であると考へた。普國が是の如き主我的立脚地を採つて、世界に立つに至つた、其の根據はどこに在るのであるか。彼の主張するところを聽くに、曰く

一、獨逸の文化は至上なるものである。

二、至上なる文化を世界に傳播するは、人類救濟の聖業である。従つて獨逸文化の傳播を妨ぐるものは、野蠻なる民族であり、頽廢せる國家である。此の如き民族國家は當然征服せられねばならぬ。

三、故に高等なる文明が劣等なる文明を支配せんが爲に、其權威に服することを肯んぜざるものに對して戰爭を起すは、避くべからざる事業である。

普國は此の主張の下に、對内政策、對外政策を定め、遠大にして而も緻密なる計畫を立て、隱忍努力、國力養成に盡したる跡は、之を二百年の前に溯りて尋ぬるを得べく、更に又之が實行の直接準備を整頓するが爲に精神と物質とを盡して集注せるは、普國が獨逸を統一して以來、實に最近五十年間の大發展勃興に現はれてゐるのである。獨逸は之が爲に其の國家を擧げて、最も有效なる社會的大組織に組み立てた。政治も教化も、總て此の方針に依つて、嚴密に統一された。風俗も習慣も思想も、悉く此の方針を實行するに都合好き形式を養成したのである。其教育の如きは勿論のことであつて、幼童よりして、此の獨逸主義を注入したのである。

此の如き獨逸文化の内容は、結局全く人格を無視し、個人を機械化し、自由意志なき宿命の世界に人間を強制するものであつて、即ち人類文明の目的が物質を進めて人格化するにありと反對に、精神を化して物質とする文明に外ならぬ。従つて機械的活動に奏效して、獨逸の權力主義を達成するには最も有效であつたのであるが、反面に於て、人生の目的に對しては大失敗の文化であると言はざるを得ないのである。實に此の文化の歸着點は權力絕對主義であり、專制至上主義であり、「目的は手段を神聖にす」る主義である。人類の福祉の爲に相共同して世界を開拓すること、國際關係の親密調和を求めること等の道德的動機を缺如せる非道德主義であつて、善惡の標準は全く獨逸の利益と否とに存するのである。即ち獨逸の利益となる行爲は善であり、獨逸の不利となる行爲は惡である。獨逸一國の發展の爲には、良心も權利も、生命も、財産も、之を蹂躪して可なり、國際公法も、近代文明の成果も、之を破壊して可なりといふ結論に達するのは、實に當然である。而して此の意味に於ての愛國は、絕對神權の命令であり、此全獨逸主義は無上の眞理であつて、批判を容さない。國民も、亦他の民族も、總て此の絕對の命令の前に跪かなくてはならぬ。

此の如き國家主義は、獨逸の主我的野心を實現するに必要であるとしても、他方、人格的の價値を自覺せる個人、

一個の理想の下に發展せんとする國民の、之に盲従することは爲し難い。此の暴君に對して忠順を誓ふことは、これ自ら奴隸となり、禽獸となることを甘んずるものである。自由意志と絶對權力主義とは、到底兩立することが出来ぬ。此に於てか、強力を以て他を征服する方針が、必然的に獨逸に採用せられざるを得ない。即ち侵略主義が、必然的の方針として採用せられたのである。彼の權力意志の實現の爲に、強大なる威力を貯へ、周到なる設備を整へ、緻密なる組織を作つて、萬事の發動を、威力發揚の一事に集中するのは、即ち此の侵略主義に外ならぬ。獨逸近代の軍備の擴張と充實とは、實に之が爲に現はれ來つたのである。而して他の各強國も、亦其の影響を被り、之に對抗するが爲に、競つて軍備を擴張せざるを得なくなつたのである。

四、獨逸の罪惡

今次の戦争は、前述の如き獨逸の權力主義の必然の實現であり、又當然の結論であつた。云はゞ、物の運動の自然の趨勢として、早晚此の大破裂に到着せずには止むことは出来なかつたのである。然れども、之が爲に幾百萬生靈の聖血を流し、幾千億の物資を徒消し、人類の文明を覆へし、品位を敗瀆したる責任に至つては、如何なる口實を以てしても、獨逸は之を負擔せざるを得ない。實に獨逸は、其の一個の野心の爲に、歴史上未曾有の大罪惡を犯したものと斷ずるも、決して過言ではないのである。

若し獨逸の爲すところにして、堂々として威力を以て正面より他國を侵迫するといふに止まつたならば、破壊的罪惡は即ち罪惡であつても、男兒らしき、大膽なる冒險を試みる者として、一味豪壯の快感を喚び起し、美的鑑賞家の稱賛を買ふの餘地を存しないとは言へない。然れども、之に伴つて犯したる最も醜劣なる罪惡に至つては、もはや其の美的評價の口實をすら、自ら抛擲し去つたものといふべきである。最も醜劣なる過失とは何ぞや。目的の爲には手

段を擇ばずといふ主義から來るところの、爲さざるところなき陰惡であつて、即ち其の野心を成就せんが爲に、極て大仕掛なる詐術陰謀を企畫し、數十年間に互り全世界に通じて、周密に普く之を施行し、武士道に於て許すべからざる、卑劣なる欺し撃を對者に喫せしめんと覘ひ居たること、これである。其の陰謀の規模の宏大にして、計畫の巧緻なるほど、獨逸自個の精神を汚毒したると同時に、世界文明の醇化を妨げたることの多大なるを見るのである。

殊に精神上の害惡として擯斥すべきは、啻に自國民の良心を癡痺せしめ、主我的誇大妄想狂に陥らしめたるのみならず、他の國民をして迷信的拜獨病恐獨病に罹らしめたるに在る。即ち獨逸の文化は、世界に於て最も優秀なるものにして、其の國家の威力は、各國の群を抜くこと遙に遠しといふ印象を、深く人心に鏤刻したること之れである。

然れども、獨逸が主動者となつて惹き起した今次の大戦争は、幸か不幸か、其の自家の譎詐陰險を暴露し、其の文化の實質并に國家の實力を、明白に暴露したのである。之に依つて近代の世界諸民族は、從來獨逸の術數に欺瞞せられて、其の實力を買ひ被つて來たが今日となつては、其教化の實質は決して尊敬すべき良性的のものに非るのみならず、却て各國家民族の風教を害することの甚きものあるを看取し得たのである。

獨逸の戰鬥力の強大は、自餘國民をして畏怖せしめてゐたのであるが、戦争の實驗は、決して豫期の如くならざることを示した。開戦の初に於て、佛軍を破つた勢は如何にも目覺しいものであつたけれども、併しそれは、ベルジク國の中立が保障せられてゐると安心して、フランスが其の方面に對する準備を差控へてゐた結果である。ロシヤも亦敗れたけれども、之れも同國の内情を顧るときは、以て獨軍の優秀を證するに足らぬ。數十年間國力を傾注せる周到緻密なる準備に對する成績として見れば、殊に各國の確認した中立條約を蹂躪し、備へなきを襲撃したに相應するだけ満足なものではない。軍隊の實質に於ても、戦前には、到底佛軍など、比較すべからざる程優秀なるが如く、我人も考へてみたのであるが、實績は必ずしも然らざるを示してゐる。期月にして先づ西方佛國の戰鬥力を滅し、次で

直に軍を東方に回して、露國を席捲するに一年を要せずといふのがその豫算であつた。然るに其計畫の全然挫折したのを見れば、獨の強味なるものも、決して豫期に副ふものではない。

愛國心に於ても、獨國民は特に優れてゐるやうに思はれて居るけれども、此は嚴重を極めた軍紀の壓制と世界の形勢を國民に知らしめざる政策與て力あることは疑ないのであつて、必ずしも精神的道德的價値を發揮してゐるものとは言へない。英佛の士氣不振、愛國心の缺乏、これ主我自尊の獨逸が獨斷的に此二國を見くびつてゐた一要件であつた。然るに佛國民が開戦と共に老幼男女皆擧つて國難に赴き、自國の利害を超越して、世界人道の爲に暴力を挫かんとする天晴れなる覺悟は、自國のみあつて他あるを知らざる獨兵に勝ること遠きものである。又英國は、自由を重んじて、徵兵制度を有せざる國であつたにも拘はらず、開戦と共に數百萬の軍隊を得、各大學の如きも、殆ど教室を空うして學生皆難に赴いたのである。凡そ是の如き愛國心の旺盛なるを示した美談は、獨り獨逸のみの事ではない、寧ろ獨逸以外の國民に多いのである。

是の如く、實價劣等なる暴力を伴へる全獨逸主義は、其目的の爲めに手段を擇ばず、暗中に大詐術を逞うしたと云ふことが、壹に自國の教化を汚瀆し、國民の道德心を害したるのみならず、外に對して國威を傷け、信用を墮したること、決して尠少ではない。近來獨逸産業勃興の結果、其の製品は世界の各市場に濶歩し、通商貿易の發達目覺まきものがあつたのであるが、今後再び此の地位を回復するは容易でなからう。學問藝術に於ても亦然りである。要するに獨逸は、各國民のポイコットを喰ひ、世界に於て孤立の地位に陥つたのである。萬一戰爭に勝利を得れば可なれども、其の敗戦の曉に於ける同國の國際的地位や眞に想像に餘りある。其の打撃たる、戰爭に由りて生じた人命及び物資の損害のみではない。而も之れ所謂自業自得なるものであつて、獨逸の從來爲し來つたこと、又現に爲しつゝあることは、畢竟自ら自國を破壊するものに外ならぬ。

獨逸の罪過の最大なるものは、全人類の要求、世界の大傾向に逆行して、各民族の精神的結合を妨礙し、其の道德的空氣を攪亂したこと、之れである。各國互に猜疑嫉妬排擠の心を藏し、公明正大眞率正直の態度を缺き、主我利己の畫策を競うて日も亦足らざる趣きのあるのは、必ずしも獨逸のみの罪ではないけれども、獨逸の陰險惡辣なる行動が、是の如き國際的道義の破壊腐敗を刺戟し助長したることは、決して尠少でない。今次の戰爭は、獨逸の非文明的、非國際的なる恐るべき世界攪亂の爪牙が、如何に深刻に各國民の胸腹に喰ひ入つて居たかを、次ぎ次ぎに暴露して來てゐる。獨逸が種々の方策を用ゐて、從來ロシヤ内政の改善を妨げ來つたのは既に明なことであるが、其の軍力的壓迫は常に佛國の善傾向の發達を沮み、其の弱點を大ならしめてゐた。又其の暗裏の活躍は英國社會の根本的改革を無効にし、更に遠く米國の國礎を動かさんとするが如き種を蒔きつけてゐる。而して東方諸國に對しては、トルコを滅亡の境に導き、殊に我が帝國を世界に孤立せしめんが爲に、陰に陽に中傷離間の妨礙策を施したことはこれ亦人の知るところである。

彼の獨帝の黃禍説は有名な話であるが、常に西洋より東洋を阻隔して、黃人を白人の奴隸たる地位に置かんと力め、かくて世界的思潮たる東西文明の調和の大傾向を不可能ならしめんとした。最後に全體の問題としては、彼のヘーグの平和會議を無意義ならしめ、國際法を無効に歸せしめたのは、全く獨逸の行動に基くのである。

要するに、是の如き獨逸の權力主義は、宇宙精神の大勢に背き、人類的道義の理想と矛盾した、誤れる哲學思想の上に立てるものであるから、假りに一時勝利を得て其の志を逞うすることが出來たとしても、早晚覆滅を免れざるは、必然のことである。況や其の勝利を得ることすら、困難なるに於てをや。併し此は、啻に獨逸の事のみでない。極端なる權力意志に偏して、依つて以て國家の隆昌を望むものは、必ずや一は自國の存立をも危くし、一は世界の調和統一を破壊することを免れないのである。換言すれば權力意志の偏重は、到底以て世界を統一する聖力ではな

らのである。

五、道德意志とは何か

權力意志を以て世界を統御せんとする弊毒は、前述の如くであつて、到底許すべからざることである。然らば之に代るものは道德意志であるが、抑道德意志とは如何なるものであるか。

道德意志説の立場に依れば、人性は本來道德意志 (Goodwill) なのである。世界の精神乃至大勢は正義、道德に向つて進展しつゝあるのである。弱肉強食主義に反して適者生存といふ、其の生存の適者は即ち道德あるものに外ならぬとするのである。善の榮え、惡の亡ぶるを信ずるのである。正義即ち權力 (Right is Might) であつて、正義が力を制馭するを信じ、道德意志の可能であり、又有效なることを信ずるのである。

此の道德意志の存在と可能と有効とは、總ての正しき國民によつて信奉せられたること勿論であるが、彼の獨逸が權力意志の權化たるが如きに對して、道德意志の發動を以て立國の根柢とした一方の代表的國家は北米合衆國である。少くとも之が建國の精神であると思ふ。故に予は北米合衆國の努力の方針を検することに依り、之を通じて道德意志の發動の如何なるものなるかを述べようと思ふ。

六、北米合衆國と道德意志の信仰

道德意志の發動に依つて世界は調和歸一すべしとの信仰を持し、之が試みに努力する傾向の著しき國家は、實に北米合衆國である。北米合衆國は、強者として世界に覇たらんが爲に自國民を訓練し又國際關係を緊縮するのではなくして、道德的良心を自覺せしめんことを目的として國民を教育し、世界共同の理想を成就せんが爲に國際交渉を進め

るのである。之れ内外に對する建國以來の國是である。北米合衆國は、各強國が軍備擴張に忙殺せられて、國民の道德と幸福とを進むべき眞の文明の發達を阻害すること甚しきを遺憾とし、其の弊害を改善する必要を考へた。而して國際間の紛擾をば、國家の良心に訴へて、平和中に解決せんがために、道義の發動を根基とする、完全なる國際法規を作り、仲裁々判の制度を設くる計畫を立て、此の方針を以て、政府、學者、宗教家、教育家、實業家等、各社會の輿論を統一し、總ての方面より全國力を綜合して、以て其の理想の實現に努力し來つたのである。勿論、合衆國民の一部には、此主義と反對の者もある。日本は不幸にして此の如き一部と衝突して居る。然し此一部を以て全體の觀察を誤つてはならぬ。

何れの國に在つても、利害に敏なるは實業家であるが、合衆國の實業家を見るに、カーネギー、ロックフェラー、ギンの如き人々があつて、國民の正き睿智と道義とを養ふが爲に、數億の大金を投じて、世界的教化の機關を設備してゐる。是の如き合衆國民の努力に依つて、平和會議は促進せられ、ブラッセルに大組織の國際協會は起され、其の他各方面に於て、平和的協同に關する研究の機運が盛になり來つたのである。而して軍國主義侵略主義に反抗して、獨逸にも此の運動の効果を及ぼさんとしたのであるが、其の參同を得ることが出來ないで、遂に今次大戰を見るに至つたのである。

七、北米合衆國參戰の意義

今度の戰爭の勃發は、たしかに從來の平和運動の失敗を示して居る。更に言はゞ、道德意志の無力を表してゐる。實に合衆國も、此の戰爭を見て始めて、其の道德意志のみに依憑し、教育法律裁判等の方法を用ひ、人の良心に訴へる方法のみにては平和を來すことの不可能を悟つたのである。道德意志に對する信仰理想のみでは、實際の罪惡を破

滅止熄せしめることが出来ぬ。力を伴はざる條約は紙屑と同様である。如何なる誓約をも蹂躪して顧みざる暴力の跋扈に對して、之を制壓する權威なく、正邪を判し賞罰を明にする嚴肅なる主力なき平和主義人道主義が、今日世界の問題を解決する能はざることは、之れ合衆國の他各國と共に經驗したるところであつて、其の目的を達する爲に、善を害する暴惡を制するが爲めに、強き力を要する。力なき者は他の暴行を傍觀するの外はない、然るに同胞の慘害を傍觀するは、決して道德に協ふものとはいへない。口に道義平和を高唱するのみで、實際に同胞の苦しみつゝある慘害を除く能はざれば、是れ寧ろ詐言を以て自ら飾るものに等しと言はなければならぬ。道德意志の實現の爲めには、權力意志の發動を必要とする。之れ米國人の意見であつて、此輿論の勝を制したるが爲に、合衆國は遂に劍を抜いて起つたのである。平和に眷々たる合衆國が戰爭に参加したのは、決して國家的我利の爲のみではない、實に人類の平和と道義とを、暴力に對して保護せんが爲である。合衆國は平素道德意志を根柢とせる、健全なる理想を以て國是とすると共に、偉大なる國力を有せるが故に、今次の人類の慘禍に對して、道德意志を有効にすべき權力意志の發動を示すに至つたのは、吾人の理解すべき要點なのである。

之を要するに道德意志を無視したる權力意志のみの盲動暴發は、決して人類の要求を充す能はず、到底成功の道なきこと。又實力なき平和運動、權威なき道德の主張のみでは、世界の理想を實現し目的を達するの効果を擧げ得ざること、道德意志は權力意志を伴はざる可らず、更に言はゞ、人格が肉體を支配することに依つて始めて實際の生活を營むことを得るが如く、道德意志が權力意志を制馭して活動することに依つて、始めて各國民族は幸福なる調和的發展を爲すを得べきこと、之れ今次の戰爭に依つて、各國民の覺り得たる結論である。合衆國の參戰は、即ち此の世界的覺醒を象徴したる運動であつて、畢竟獨逸とは反對の一方に偏して居た既往の過誤を改め、完全なる方針の下に、大なる世界的意志を達成せんとする努力であると解すべきである。

北米合衆國が道德主義平和主義を棄て、軍國主義武斷主義に變化したといふ非難は、同國の參戰に對して一部から起つたのである。然れども之恐くは該國の真相を審にせざる者の臆斷であつて、畢竟獨逸主義を標準として、總て他國も亦然るべしと忖度するものに過ぎないと信ずる。合衆國は參戰決定と共に非常なる軍備に着手したるは、如何にも事實であるが、人類の爲に、各國民族の爲に、暴力に對して平和を保護する必要上、已むを得ざるに出たるものであることは、同國の輿論に徴して明かである。兵役登録を開始したる時、自ら進んで登録を受けたる者一日にして一千萬人に達したる如き、各大學殊に大なる大學に於ては、學生等は皆出戰の準備を爲し、學校當事者の制限にも拘はらず、毎日三時間づゝの練兵を始めたる如き、又金力ある青年は、自費を投じて準備を整へたるが如き、之れ決して血に渴したる侵略の興味から出たのではなく、道義に對して興奮するアメリカ魂の發現に外ならぬ。彼の獨立戰爭、南北戰爭に際しても、國民皆義の爲に起つて兵となり、事終れば隊伍を解いて、復平生の農工商の職業に就き、毫も昔日劒戟流血の夢を後に殘さなかつたのを見ても、容易に所謂軍國主義に傾く國民でないことは明白である。

更に又或る者は非難して、合衆國は、資本金階級に屬する少數者の爲に支配せられてゐる。種々の國民的國際的活動も、畢竟彼等資本家の功利的満足の手段たるに外ならぬ、従つて其の實質に於ては、全く軍國主義と異らぬものであると。然れども、カーネギーとクルップ會社との所行を比較して見ても明である通り、合衆國の富豪は我慾の満足の爲めにのみ其の莫大なる富を奉せずして、人道の爲に、文明教化の爲に、費消してゐる。一部の資本家に惡辣なるものあるを免れずとするも、大體の傾向は我利的でなくして、公共的であると結論することが出来る。従つて合衆國が一部資本家の爲に制せられて、非道德主義に陥ると見るは當を得ない。

吾人が北米合衆國に就いて言を費したのは、決して徒に該國に心酔し、無意義に辯護又は讚美せんが爲ではない。唯之を通じて聯合國の目的は那邊に在るか、其の精神は如何なるかを明にせんが爲である。假に合衆國局處に對する

吾人の判断に誤ありとしても、其の大體の趨向は道德意志にありとする判断に至つては誤は斷じてない。蓋し合衆國の參戰は、對獨戰爭の眞義、更に言はば權力意志對道德意志の關係を看取するに最も便宜であると信じたるに外ならぬ。

八、英國及び佛國と道德意志

英國を非難する者は曰く、英國は絶大なる海軍力を備へて、世界の全海面を制御し、世界の到る所に殖民地を領有して居る。彼は實に大なる軍國主義の國ではないかと。吾人を以て之を見るに、英國の歴史には如何にも汚點のない事はない。今日に於ても權力主義的思想を抱く者のあるのは事實である。然れども時と共に進化して、大體に於て益々平和主義に傾いて來てゐることは疑ふことが出來ぬ。彼の北米合衆國の獨立戰爭に於て權力主義に基く專制的支配は其の失敗を示して、人民の自治を承認してより以來、次第に人道主義的空氣を濃厚にし、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、ツランスワール其他に對しては民主的自治制度を布き、住民の自由と統一とを容認して、各自の生活に満足せしめ、印度埃及も其の民族が教化の發達によりて適當なる資格を具備するに至れば、他と同様に自治に委せんとする方針を立てゝゐるのである。要するに、英國軍備の方針は其の廣大なる殖民地を保護し、國民の生存を維持する爲に大海軍力を要するものであつて、最早や侵略征服の爲ではない、今度の大戰に加はつた理由及び其の採用した方針に顧みても、其の國家の根柢に於て、人類世界を支配すべき究竟の權威は道德意志であると信ずる信仰を持せることは、敢て又疑ふを要せぬのである。吾人は固く信ずる。獨逸に對して戦ひを宣せる英國は、ベルジクを救濟し、且つ其他の弱國を保護し、國際公法を維持せんが爲に、道德的動機より劔を抜けるものであることを。道義の爲に義憤を發することは、實に彼のピュリタンやカーライルが高調したる如く、名譽ある大英國の傳統的氣魄であ

る。若し夫れ英國は彼の如き大國なるが故に分裂せしむ可しと論ずるものゝ如きは、恰も富豪を嫉んで放火強盜を爲すものと一般なるものであつて、之れ即ち獨逸主義である。英國の解體を希望するものゝ如きは、決して道德意志を保有する國民ではないのである。

佛國に就いては敢て多言するまでもなく、祖國を保護せんが爲に、將た人道を維持せんが爲めに戦ふものであつて、我利的帝國主義の爲に侵略掠奪の爲に、戦ふものでないことは、何人も疑はざるところである。即ち權力主義的動機に出づるに非ずして、道德意志の實現を全くせんが爲に、權力意志の發動を許したものである。

之を要するに、今や各國は、極端なる權力意志を採用せる利己私我的國家の暴力に對し世界の秩序を保ち、人類の幸福を全くせんが爲に戦ふ。更に言はゞ、動物的なる權力意志の到底人類破滅の基たるを悟つて、道德意志の秩序の下に人類の活動發展を統制せんと努力奮闘する、之れ實に現時の世界的大運動の意義である。

九、我が帝國の參戰と一部の民論

現在進行中の戦争は實に歴史上空前の大事件である。或は之れ從來文明の總勘定で、新き世界、新き國民生活の方式が、此中から生れ出るであらう。而して我帝國は、第一は日英同盟の義を重じて之に参加し、今日も諸種の努力を同盟諸國の爲にして居る。而して之を交戦兩軍の主義精神から見れば、前述の如く、權力意志と道德意志とが世界支配權を争ひつつある。權力意志が打勝つて、其の暴力が世界を支配するが如きこと若しありとすれば、吾人の生活は忽ちにして禽搏獸噬の暗黒時代に沈淪し、絶えざる脅威を甘受しなければならぬ。之に反して道德主義が勝を占める様になれば、各國民の自由と國際の正義とを各國共同の保證の下に實行し得よう。即ち道德主義に基く新文明の世界が生るるか、將た權力主義萬能の暗黒時代が來るべきか、今日は實に之れ全世界分け目の一大轉機である。而してそ

は又同時に我が帝國の一大危機である。

之を個々の立場より考ふるも、國際的地位關係は、世界の文明精神と共に、今後大に變化せざるを得ない。此の時機に際會して、我が帝國は果して如何なる態度を執るべきであるか。之れ實に永遠に且つ廣汎に眼界を開いて深思熟慮し、確固たる決心を爲すべき緊急要務ではないか。

我が同胞の間には、兩交戰團體の旗色を窺ひ、何れにても勝味の多き方に傾かんとするが如き、無主義無節操、首鼠兩端を持するを以て巧慧なる方針と考ふるが如き者が果してなからうか。諸強國が交戰に忙殺せられて他を顧る能はざるを奇貨措くべしと爲し、其の間に立つて、一意唯利を之れ謀るを得策とするが如き者は果して存しないか。各國民の疲勞し衰憊して、容易に回復し難き狀態に立ち至るを待ち、大に政治上經濟上の野心を逞くするを以て、世界に對する大計とするが如きものは果してありはしないか。更に又獨逸の亞流となり、侵略的軍國主義に依つて、大に權力意志を活躍せしめんと期する如き謬妄愛國者は果して存しないか。

吾人は此の如き短見淺慮者流が今日多く存在するとは信じ得ない。然れども國民は個人として千差萬別の興味と慾望とを有するが故に、一小部分に於て是の如きの議論を試る者があると云ふ事が事實としたならば大いに憂慮せざるを得ない。假りに何等か時代の錯誤の爲に變調を呈して、萬一此等非道德的思想が國民の輿論を動かし、多數を指導し、國際活動に影響を與ふることあらんには、帝國は果して如何なる結果を收獲せねばならぬであらうか。多言する迄もなく、君子國武士道の國民たる從來の世界的名譽をば一朝にして失墜し、開戰の始に堂々と參戰した意義と努力とを無効に歸し、信用を滅ぼし、國威を損し、遂に全く孤立の地位に窘窮せざるべからざること、恰も今日獨逸が全世界の糺彈を被りつつあると同一の運命に陥らぬとは限らない。

火事場泥棒は固より卑劣なる罪人である。然れども、日和を見て、風次第に動く順慶流も決して名譽と繁榮とを持

ち來さない。公明正大と清節高操とを念として唯義に之れ勇み、弱を扶け強を挫き、直前勇往して水火を辭せざる我が日本武士の精神は、終始一貫の大義に基づくの外、功利打算便宜利己の行動をば斷じて許さない。而して是れ則ち帝國の名譽と眞個の利益とを齎らす所以の王道的政策に外ならぬのである。

嗚呼我が帝國は如何なる方針を立てて、以て參戰の意義を徹底し、世界の與國と共に將來の劃策をなすべきか。又世界の文明に對して特別卓抜の貢獻をなすべきか。之れ實に左右を顧みて躊躇逡巡することを容さざる。刻下焦眉の喫緊問題である。

或は言ふであらう。帝國の主義方針は夙に一定して居る。其の主義方針に従つて今日まで着々として進み來つたのである。明日も亦此の如きのみと。然れども全國民果して其主義方針に同化せられて居るか。歷史上未曾有の時勢に際遇せる大和民族として、其の覺悟態度は果して徹底確立して居るか。我等は果して時勢と進路とを明に自覺して居るか。我等は如何に覺醒し、如何なる所信を確持するか。吾人の關心する所は唯此の點に在るのである。

一〇、帝國の國是と國民の覺悟

實に今日は歷史上未曾有の大時期である、世界的維新の大轉回期である。此の大時期の理想的思潮は何であるか、此の大轉回期の樞軸は何であるか。若し其の大勢に乗じ、其樞軸を把握するを得ば、茲に世界的國家として新面目を起すことが出来るであらう。若し又躊躇逡巡して一步を誤らば、文化史上無二絶好の機會を失ふものといふべきである。

吾人の見る所に依れば、既述の如く此大戦の教訓に依り、世界は漸く單純なる國家的利己主義から醒めて、世界的公義に奮起し、國民的活動をば力ある道德主義の實現たらしめんと努力する傾向になつて來た。而して此の主張を取

つて一考するに、是れ即ち明治維新の大理想たる「舊來の陋習を破り、天地の公道に基くべし」といふと其の趣旨を同うするものではあるまいか。果して然りとすれば、帝國は既に夙に今日の時機に施すべき大主義大國是を有して居たわけである。従つて吾人は此の國是を、今日の時代に適當する形式に於て行へば可なるだけである。我が武士道至高の精神は、大義名分の爲に私情を抛つて起つことに存する。而して維新の根本主義を實現すること、之れ直に世界に對して大義名分を唱へることであつて、而も同時に世界の潮流に乗ずる所以であると確信する。

今日世界の進展を統括すべき主義は、單なる權力意志に非ず、又單なる道德意志に非ず、道德に依りて支配せらるゝ權力意志、權力意志によりて支持さるゝ道德意志でなければならぬとは既に吾人の論じたところである。之れ即ち完全意志であつて即ち宇宙の大精神、更に言はゞ天道意志に發起するものであり、之が實行は即ち天意に感應し協同する人類の向上的努力であり、世界改善進展の至道である。所謂天地の公道に従ふとは實に此に外ならぬ。「本を本として正にかへり、元を元として邪をすつ」といふ教へ、亦此義に外ならぬと思ふ。

吾人は帝國興發の精神が緊密に此の本義に合するものあるを見て、眞に愉快を感じざるを得ないのである。既に有する所の貴重なる此の根本主義を棄て、單純なる權力意志を逞くせんと夢る如き者にして若しあらば、そは蓋に天道意志に戻り、又世界の氣勢に逆行するものであるのみならず、實に我が國家の理想を無視し、國民精神を蹂躪せんとするものに外ならぬ。「威あつて道なき者は必ず亡ぶ」といふ。吾人は國民として自國を愛するが故に、危険なる軍國主義一偏の論者に同ずることができない。

我が本來の國是は即ち世界の新精神であり、而して天道意志である。吾人は宜く此の大公義を執り、萬邦協同人類歸一の大希望の下に、内には國民の發達を指導し、國家の發展を策し、外には東西文明の調和を計り、人類民族の向上を助けなければならぬ。而して此が爲に目下の時局に對しては、最後の責任を負擔する覺悟を以て、進んで積極的

態度を執り、徹底的に惡を亡ぼし、暴を鎮むる努力に勵まなければならぬ。而もその實力を以て、實地に實績を擧げなければならぬ。之れ實に困難なる道である。然れども食に飽き懶眠を貪るを得ば、如何なる穢醜をも厭はざるは豈犬の境界である。此の如き安逸に満足せず、歩々向上發展を求めんとする國民は、困難と戰ふことを避けてはならぬ。義を見て難を避けざるは、之れ我が武士道の精神である。

今や世界が脅威を被りつゝある大難の爲に、國力を擧げて赴援することは、即ち大和魂の新發展である、武士道の世界的進軍、東西調和の使命の實行である。而して國民に與ふるに耳目皮相の安逸功利を以てせずして、敢て理想の難業を以てするは、之れ眞に國民を愛し國家を敬する最善の道である。是故に、吾人は舉國一致、以て天意人道に隨順し、正大なる主義を執り、公義の爲に最後まで責任を負擔する態度を確持せんことを切望する。

我が同胞は由來天祐を信じて居る。抑も天は何を祐くるか。「天の助くる所は順なり」「神は常に祐くることなし、惟徳に是れ依る」「天の助くる所は小なりと雖も必ず大なり、天の違くる所は成ると雖も必ず敗る」。吾人は此の古人の言の確乎たる眞理なるを思ふ。實に天祐を祈るの道は、唯天道を奉じて之を實行するより外にはないのである。

交戦同盟國間に民本主義の聲盛なるを見、此を以て我國體と相反するものとなし、此風潮を避けて國體の安泰を期する爲には、世界に特絶の地位を占める要があると論ずる者もある。若し世界各國民の協同運動に深入りすれば、民本主義の思想は忽ち侵入し來り、爲に我が國體を傷けるやうな憂があると考ふる人がある。

然れども吾人の所見は全く之れに反する。吾人の解釋に依れば、我國の王政は由來立派に民本主義を包含してあるのである。民本主義とは國民の意志と其の永遠の福利とを顧み、之れを善導し醇化しつつ、其の満足と實現とを計る政治であるが、我が列聖の力め給ひしところは即ち是れであつた。「君は民を以て本となす」といふ古聖の言がある

が、我が國に於て、君の軫念は常に惟民の休戚の上に存し、常に民意を教導し發揚するに力め給うた。彼の、「庶民に至るまで其志を遂げしむべし」との御誓文の主旨は、即ち眞の王政である。彼の民を虐して一個人の野心と虚榮とを充せる外國專制君主の暴政の如きは、其の痕跡だも我が歴史上に發見することが出来ない。君の心は即ち民の心、民の心は即ち君の心、君民一體、四民平等、相頼り、相扶けて、金甌無缺の國體美を濟せる有様は、之れ實に理想的の王道であつて、即ち又直に民本政治でなくて何であるか。故に國民は未だ曾て國體に對して不平を抱いたことはない。若し不平が起るとすれば、それは當局官僚の施設と態度とに對する異論である。而して此は國體とは全く別問題に屬する。若し官民共に、眞に能く我が國體の實質を解し、忠直其職に當り、熱誠其責を竭さば、我國で政治上の不平は起らない。民の志能く達して不平なし、此れ以外の民本政治があるであらうか。

實に憂ふべきは、國體と民本主義との背反に非ず、寧ろ是の如き理想的國體の固有を自覺せず、益々其の獨特の長所を發揮するに力めざる事である。又國民が悉く忠直にして本分を盡し職責を苟もせず、國家の爲に心身を献ずる態度の不足なる一事である。憂ふべきものあらば、唯是れのみである。若し此處に不足するところなくんば、外國との協同の如き、何等の悪影響を受ける筈がない。國民は須く公義を唱ふる國家の大方針の下に、舉國一致、進んで我國體の如何に王道的にして又民本的なるかを、他に示すべきである。

或は又公義の爲に起つと言へば甚だ壯烈なるが如きも、其の實は唯他の便宜の爲に利用せらるゝに止まり、表面の盟約や協定は、裏面の實質に於て破毀せられ、遂には狡兎死して良狗煮らるゝの愚を見るに至らうかと憂ふる者もある。如何にも唯權力意志を以て功利を貪る舊式の國際道德のみから見れば、全く之を杞憂として斥くべきではあるまい。然れども吾人は人類の覺醒を信じ、世界の新潮を信じ、道義の權威を信じ、宇宙の秩序を信じ、殊に帝國の天祐を信するものである。大和魂と武士道とを以て、天地の公道、人類の正義の爲に結束一致して起つ七千萬同胞の威力

を信ずるものである。我は他の後塵を拜するに非ず、附和雷同するに非ず、確信あり操持あり、正道に於て自發して進むのである。而も其の正道は萬善歸一の大主義であつて、目下世界の希求する所たるに於ては、何の疑惧するところなく、爲すべき所を爲して可なり。若し今後正義の名を借りて利己の實を行ふ者が世界に起らば、單に帝國の利害の爲でなく、公義人道の爲に之を討滅すべきである。

要するに、帝國今日の方針は唯大義に於て舉國一致、以て世界歸一の先導を爲すべきである。之れ我が帝國の自ら立ち且つ世界を救ふ所以である。天地の公道に基いて、世界の陋習を破るの大國是、東西の文明を調和して、人類の歸一向上を計る大使命、之を實地に遂行すべき絶好の機會は、今次の世界的動亂を措いて又他に求めることが出来ぬ。吾人は、我が七千萬同胞が悉く皆道徳意志の實現に依りて、世界維新の大業を完成するの責任を其の雙肩に負擔して奮起せんことを切望に堪へない。此の覺悟、此の精神に於て實地に各國と協同すること、之れ則ち今日帝國を世界に興すの原動力である。

(大正六年十二月出版)